

コミュニケーションメディアとしての 農業観について

加藤 貞通

本論は藤本敏夫(1944–2002)の農業観にはエコロジー思想が貫流していることを検証し、農業をコミュニケーションメディアとみなす趣旨を考察する。藤本は2002年7月に58歳で逝去したが、死後出版の2冊を含めて10冊余の著作を残した。とはいうものの「書きおろすはずの文章の、最も大切な部分も書き終えることができませんでした」と夫人・加藤登紀子が急逝を慨嘆したように(『農的幸福論』4)、たしかに彼は自分の思想を十分に著し展開したとは言い難いかもしれない。しかし彼は理論家である以上に、なによりも先ず行動の人であり、多岐に亘る行動の記録を残してくれた。第二次世界大戦末から高度経済成長期を経て21世紀にいたる日本の社会情勢を背景にした彼の生涯、特に1960年代後半から70年代始めにかけての大学紛争における全学連委員長としての行動から、有機農業と有機農産物の流通・普及運動、農事組合・鴨川自然王国経営に向かう行動の軌跡には、振幅は大きいが一貫した流れが見受けられるように思われる。文明論的な農的ヴィジョンと呼べる域にまで達していたと思われる彼の農業観と行動の軌跡の双方をたどり、筆者の提唱しているエコ・コミュニケーション論の3レベル、すなわち社会経済的人間の領域、生態学的自然の領域、および精神的主体性の領域に照らし合わせつつ、これらの検証・考察をすすめれば、彼のいう「農業は宇宙と人間のコミュニケーションメディア」(『有機農業心得』30)であるとの趣旨も見えてくるに違いない。

1. 「持続循環型田園都市」と「里山往還型半農生活」を「エコファーマー」と「ウェルネスファーマー」の連携で創出する

藤本の農的ヴィジョンが最も凝縮されているのは、死の直前2002年5月に農林水産大臣宛に提出した建白書である。それには「「持続循環型田園都市」と「里山往還型半農生活」を「エコファーマー」と「ウェルネスファーマー」の連携で創出する」という長い題に「農林水産省の20世紀の反省と21世紀の希望」という副題が付けられていた。提出者は「農事組合法人・鴨川自然王国 代表 藤本敏夫」となっている(『農的幸福論』186)。まず提案の内容を確認しておくことにしよう。彼自身が内容を次のように要約している。

「“健康と環境”を保全する“持続と循環”の仕組みをもった農業と地域社会を創り上げ、“公開と公正”に基づく国民的合意の中で、日本および日本人の“自給と自立”を達成すること」

〔中 略〕

「プロ農家の『エコファーマー』としての再編成と、国民・市民の『ウェルネスファーマー』としての登場を通して、21世紀型地域社会『持続循環型田園都市』と21世紀型生活スタイル『里山往還型半農生活』を創造すること」

〔中 略〕

「農業」を中核に据えた日本の地域社会づくりと「農的生活」をベースにした、日本人の生活設計が〔……〕目指すべき目的・目標だといえましょう。（『農的幸福論』188）

<二つの農業基本法>

藤本が先頭に掲げ最も強調している第1点、「“健康と環境”を保全する“持続と循環”の仕組みをもった農業と地域社会」を創り上げる提案の背景には、1961年制定の「農業基本法」と1999年制定の新たな基本法「食料・農業・農村基本法」との間の大きなギャップと危機意識が横たわっている。彼は、1961年の「農業基本法」の骨子は「日本農業の近代化」すなわち「農業の工業化」にあったと見なし、同基本法の具体的な政策は、工業化の一般的特色「巨大化」「分業化」「平均化」をそのままに反映し、「機械化」「農薬・化学肥料多投」「単作奨励」の方針を農林水産省と農業協同組合の連携で全国的に推し進めるものであったと述べている（『農的幸福論』190-1）。その結果、水田中心の基盤整備と生産性向上を達成した反面、特に健康と環境の面において様々な問題が続出してきたのであるが、その反省に立って1999年7月16日、「食料・農業・農村基本法」が制定された。この「食料・農業・農村基本法」は、（1）自給率の向上、（2）多面的機能の重視、（3）持続農業の推進、（4）農村の振興、の4つの理念を国民に提示し、「健康と環境に貢献する農業の必要性」を正面からとりあげたものとして、彼は極めて高く評価している（190-1）。

（1）の食料自給率は、二つの基本法を隔てる約40年間にカロリーベースで79%から40%に下がった。これに対処するため、2000年3月発表の「食料・農業・農村基本計画」では10年後の2010年までに自給率を45%に引き上げることを目標と定めたのであるが、その後まったく向上の兆しはみられず、2005年3月に新しい「食料・農業・農村基本計画」を発表し、目標達成年を5年先に延ばした。つまり2005年のカロリーベース食料自給率40%を2015年までに45%に引き上げることを目標に掲げることに切り換えた（詳しくは農林水産省の「食料自給率の部屋」参照）。ちなみに主要先進国の食料自給率

(2001年度)は、カナダ142%、アメリカ122%、フランス121%、ドイツ99%、イギリス61%、日本40%で、日本の低さが際だっている。また品目別には、主食用米100%、鶏卵95%、野菜82%、乳製品68%、魚介類53%、牛肉34%、穀物28%で、主食用米の100%自給と対照的に、牛肉や穀物の低さが際だっている(政策工房J-Way)。

食料自給率の低さに関わる様々な議論と並行して1990年代以来深刻な社会的混乱を再三引き起こしている問題に、食物中の残留農薬やダイオキシン、BSE(牛海綿状脳症)、鳥インフルエンザ、遺伝子組み換え農産物など、食品の安全性・健康に関わる問題と、農業人口の減少および高齢化の問題がある。農業就業者数は1960年代始めの1400万人が40年後2000年時点で260万人台に減ったと見積もられ、しかもその多くは高齢化しており、後継者不足は深刻である。これらに加えて高度経済成長・重工業化政策期以来続く歯止めのかからない耕作放棄地の増加および耕地面積の減少の傾向が、至るところで環境の荒廃を引き起こしていることはいうまでもない。食料の60%を海外からの輸入に依存する状況下において、これらの複合的問題群は、直接にまた幾重にも資本主義経済下の市場原理に疑問を投げかける。

<エコファーマーとウェルネスファーマー>

元全共闘の闘士ならばきっとWTO(世界貿易機関)を先ずやり玉に挙げ、根本的元凶として資本主義体制を非難するに違いないとあらかじめ臆断する者は、肩すかしを食うだろう。藤本の提案は、市場経済やWTOを拒否することでも関税障壁や多面的機能論で切り抜けようということでもなく、「市場経済の王道を行き」「資本主義市場経済のルールに沿って論争をリードし」「健康・環境コストを正當に評価する商品経済の時代の到来」を広く消費生活者に告げ知らせることである(『農的幸福論』192-4)。彼が市場経済やWTOを容認するのは、このように、「健康・環境コスト」を生産コストに繰り込んで価格設定する市場にすることが条件である。農産物の生産方法とその結果としての「質の違い」を理解してもらい「国産農産物を日本国民にもっと買ってもらう」ためには、「マーケティングと、それに基づく商品設計・商品開発」「販売戦略」が求められること、その具体化策として健康と環境に貢献する「持続農業認定農家」(エコファーマー)を慣行農業の上位に位置づけること、および民間支援組織としてエコファーマーサポートセンターを設立することが大切だとしている(195-6)。堆肥投入による土作り、食品リサイクルと有機資源循環、地産地消運動、豊かな自然環境・防災機能など多面的機能の重視は、国産農産物の価値を引き出し、結果として自給率の向上や農村の振興をもたらすと彼は主張する(197)。

前述の「エコファーマー」とは、1999年制定の「持続性の高い農業生産方式の導入の促進に関する法律」(通称「持続農業法」)により都道府県から認定された農業者を指す

愛称である。エコファーマーに認定された農業者は、「有機質資材による土壌改善技術」(堆肥の施用、緑肥作物の栽培など)「化学肥料低減技術」(有機質肥料の利用、局所施肥など)「化学農薬低減技術」等を一定割合以上の耕作地に導入している者であり、金融・税制上の特例措置を受けることができることになっている。「エコファーマー」が法律で規定された名称であるのに対し、「ウェルネスファーマー」は藤本による造語で、「農民でなかった人が新規に就農したり、他に定職を持ちながら農業にも携わる兼業農家を目的意識的に志したり、まったく趣味として農的生活を楽しむ人を指して作られた」と説明されている(『農的幸福論』198)。「ウェルネスファーマー」の提唱には、農業就業者の止めどない減少と急速な高齢化への対策としての意味と、農的ライフスタイル導入の意味が込められている。

一直線に生産農家となるための手だて、方法の国民的な提示も必要ですが、「自然に親しみたい」「農作業を楽しみたい」という農的生活への興味と関心を多種多様に汲み上げ、プロ農家を支える広い裾野を作ることも考えねばなりません。

「ウェルネスファーマー」は子供たちの生命共育、家族の健康など、生活者の直面する問題解決のために、国民の生活の中に農的世界を導入して、「健康」と「環境」を保全するライフスタイルであるとも言えます。(『農的幸福論』198)

実のところ、前者「エコファーマー」のみの内容であれば、それはすでに「持続農業法」で推進を定めている事柄であり特に独創性はない。藤本の独創性は「ウェルネスファーマー」の提案にあり、その発想は以下の状況の把握の上に成立している。既に述べたように1999年の「食料・農業・農村基本法」は、1961年の「農業基本法」が推進した農業近代化、即ち工業化の弊害が甚だしかったことの反省に立つものであるけれども、工業化は農業の分野でのみ推進されたわけではない。1950年代末以来、日本社会のあらゆる方面で高度経済成長政策の名の下に工業化・生産効率強化が広範囲に推し進められたからこそ、農村ばかりでなく、大都市を含め日本社会のいたるところで社会構造が変わり、環境や健康に深刻な問題が生じたのだといえる。しかしながら農業以外の他の分野で、「食料・農業・農村基本法」に相当する新法は打ち出されていないし、生産規模拡大、効率性重視を基調とする経済運営・社会政策に対する根本的な反省の声も聞かれない。このような状況を反映して、1999年の新基本法の掲げる4つの高い理念にも拘わらず、1961年の基本法下の効率化追求の基調は従前通り受け継がれ、理念実現は遅れるばかりである。2005年発表の基本計画においてさえ専ら専業生産農家の規模拡大・効率化や法人化による担い手育成が叫ばれ、他方マスコミでは農園の工場化など新しいテクノロジー導入がもてはやされるありさまである。このような状況であるから

こそ、藤本は「ウェルネスファーマー」を提唱したのであり、建白書提出の意味もそこにある。

藤本が言うところの「生活者の直面する問題」は（『農的幸福論』198）、たとえ生産効率を飛躍的に高めて食料自給率を100%にし、しかも有機栽培農作物の占める割合を100%にしたとしても、解決しない問題である。その点が肝心である。彼自身は、それを『現代有機農業心得』のなかで次のように言い表している。

私たちに本当に必要なものは、「有機栽培農作物」ではなく、「有機農業」そのものなのです。それを共通の理解とすることさえできれば、いまという時代の私たちの役割は、ほぼ100%達成したとあってよいでしょう。（3）

別な言い方をすると、（生産効率や食料自給率向上などの）人間の社会経済的領域の事柄や、（生理的・物質的意味での身体的健康や環境などを包む）生態学的自然の領域の事柄として理解するだけでは不十分だということである。必要なのは、筆者の用語でいえば、精神的主体性の領域の事柄として、しかも他の二領域と切り離さず、流動的相互関係（エコ・コミュニケーション）のなかに理解することである。藤本の用語でいえば、必要なのは、「有機農業そのもの」あるいは「生活の中に農的世界を導入して、「健康」と「環境」を保全するライフスタイル」であり、また「エコファーマーとウェルネスファーマー」の普及だということになる。

<里山・里地におけるウェルネスファーマーの役割>

中山間地域、いわゆる里山・里地¹を活用する役割をウェルネスファーマーに与えることによって、藤本の提案はいっきよに精神的主体性の領域に深く拡がるものになる。彼によれば里山・里地は、森と草原の接点で、太古の森を出た人類が先ず住み着いた場所である。人類は、後に大きな河川に沿う平原に巨大な都市文明を作り始めるが、それまでの長い間、人類史のほとんどを里山・里地で暮らしてきた（『農的幸福論』199）。そこは「人類のオリジン」と呼べる場所であり、「狩猟・採取・飼育・栽培に適した生産性に富んだ」「貯蔵と安息」の空間である。それ故、都市生活によって「ストレス加重になった人々の心と身体は、この「里山・里地」において癒され回復」される。ウェルネスファーマーは里山・里地をもう一つの日常として活用することによって、「過疎になった農村と過密になった都市の両方の矛盾を解決」し、「日本人の失われた「自然と歴史」を取り戻す」のである（199）。幾世代も昔からの人間たちと里山・里地の生活体験を共有し、失われた「自然と歴史」（199）を取り戻すということは、まさしく深い主体性領域のコミュニケーションにほかならない。

ウェルネスファーマーに託されたコミュニケーションへの期待は極めて大きい。「農業は宇宙と人間のコミュニケーションメディアとして、人々の創造性を喚起し、大きな生命連鎖、輪廻の中にわたしたちを誘導します」と彼は述べる(『有機農業心得』30)が、宇宙とのコミュニケーションという、読者はいささか大仰な、またはロマンティックな印象を持つかもしれない。その点について彼は次のように言う。

ロマンチックな「自然主義」で発言しているのではありません。宇宙と地球の科学進化、生命進化の歴史を踏まえ、人間の生理に刻み込まれた生命連鎖の結論として申し上げているのです。(『有機農業心得』31)

前ページにおいて里山・里地は人類史の大部分を占める「人類のオリジン」と呼べる場所であるとの藤本の考えを紹介したが、ここでは更に、「人間の生理」すなわち身体と「生命連鎖」すなわち生態学的な関係性が加えられている。農業は宇宙とのコミュニケーションメディアだということは、このように里山における農業が精神的主体性の領域と生態学的自然の領域に亘る身体的コミュニケーションの場、すべてが交差する場だという意味である。同じ趣旨で彼は次のようにも述べている。

人間は食物連鎖の高位に位置する有機生命体ですから、人間の「食」は地球上の全生物の生命活動の結節点となっており、その「食」を安定化するための方法である「農業」もまた、人間と社会と自然との関係において重要な結節点とならざるを得ないのです。(『農的幸福論』189)

ウェルネスファーマーはさらに、社会経済的人間の領域における大規模なコミュニケーションの媒介者の役割を与えられている。彼らは、一つには、里山・里地と都市、プロの生産農家とそれ以外のすべての「国民市民」とを媒介し、「地球環境の基底をなすものとしての「農」、つまり、文明としての「農」の意味と役割」(『有機農業心得』31)を伝える者として期待されている。

新しい文明創造の鍵は、農民の手に握られているのです。／そして、その農民とは現在の農家のみをさすのではないということを生産農家自らが認識しておかなければなりません。農民とはつまり、この世に生きるすべての人をさすのです。結局、わたしたち人間は農から生まれて農に帰るといことなのでしょう。(32)

ウェルネスファーマーの役割は、「農民とはつまり、この世に生きるすべての人」であるという自覚・アイデンティティを広くコミュニケート(伝え・共有)しあうことである。

ウェルネスファーマーには、もう一つ、合理化・リストラの進行する現実の社会情勢を見据えた「ワークシェアリング」構想が組み合わされている。藤本の構想では、ウェルネスファーマーは「もう一つの労働」「もう一つの社会参加」であり、5名から10名のチームを作り「里山・里地に定住・半定住・往還（行ったり来たり）し」プロの生産農家、すなわちエコファーマーの指導の下に農業に従事し、「自給分プラスアルファの農産物を生産し、余剰農産物は企業と労働組合の協力を得て、元同僚の社員がサポーターとして購入する」仕組みである（『農的幸福論』200）。乱開発で土地の自然と歴史を失った日本の地域社会を、「農工一体」²の「持続循環型田園都市」として再構築すれば、文化の伝承とともに健康と環境を保全する地域社会モデルが創り出せる、その建設を推進する責任は農林水産省にある；また食と農という生命の原点を大切にするライフスタイル・「里山往還型半農生活」を提案する責任も農林水産省にある（201）、と藤本は論じ、農林水産省に「食料・農業・農村基本法」の理念の実現を迫ったのであった。

2. 共同体とは人間と社会と自然というトータルな生命の流れである

<マクルーハンとの対照>

1960～80年代に、世界的に大きな話題になったマーシャル・マクルーハン（1911–1980）のメディア論が、最近コンピュータやIT（情報技術）の発達とインターネット、衛星TVネットワーク、その他様々なデジタル電子メディアの目覚ましい普及に伴い、彼の言葉どおり「すべての人間活動に同時的な場」・「単一空間」・「地球村」（global village）状況が現実化しはじめたかのような印象が生じたことに因り（マクルーハン『ゲーテンベルク』52）、再び脚光を浴びている。マクルーハンは、『メディア論——人間の拡張の諸相』（*Understanding Media: The Extensions of Man*）の第二部において26のメディアの例——「話されることば」「書かれたことば」「道路と紙のルート」「数」「衣服」「住宅」「貨幣」「時計」「印刷」「漫画」「印刷されたことば」「車輪、自転車、飛行機」「写真」「新聞」「自動車」「広告」「ゲーム」「電信」「タイプライター」「電話」「蓄音機」「映画」「ラジオ」「テレビ」「兵器」「オートメーション」——をあげメディアはいかなるものであるかを解説しているが（『メディア論』79-376）、藤本敏夫のコミュニケーションメディアとしての農業観を考えるうえで興味深い。第一に、メディアといえば専らマス・メディアとしか結びつけない固定的観念を打破し、マクルーハンのメディア概念が例証するように、メディアを柔軟に幅広くとらえ文明論的に展望しない限り藤本の農業観の趣旨は把握できそうにないからである。その点で、情報化の時代に先駆けて媒体／形式／ゲシュタルトとしてのメディアと、視覚的メディアによって抑圧／分裂／閉鎖されるもの／五感の比率／身体に、広範囲な注目を集めたマクルーハンの功績は大きい。

しかし問題も大きい。『メディア論』（1964年刊）に先行する『ゲーテンベルクの銀河系』（*The Gutenberg Galaxy* 1962年刊）では「道具を作る動物である人間は、音声、文字、ラジオ等々、いずれの手段を用いて語ろうが、いずれにせよ自分たちの感覚器官のどれかひとつを拡張している……」（『ゲーテンベルク』7）と述べているように、メディアという言葉は、マクルーハンの場合、道具や技術、テクノロジー等の言葉に置き換え可能なのである。実際、「マクルーハンの言う定義はもっと広く、極端に言えばわれわれの生活に関係するすべての人工物、広い意味ではテクノロジーも対象とする。そこではメディアでないものを見付けるのが困難」（服部 72-3）でさえある。『メディア論』（*Understanding Media*）の副題「人間の拡張の諸相」（*The Extensions of Man*）は、メディアがテクノロジーと置き換え可能であるとすると、メディア（=テクノロジー）が自然界における人間の領域（あるいは植民地）の拡張（*extension*）または拡大（*expansion*）をもたらす要因であったことを図らずも証言する植民地拡張に関わる副題に換わる。問題は人間の拡張や拡大に対するマクルーハンの複合的な態度である。彼が主著『メディア論——人間の拡張の諸相』と『ゲーテンベルクの銀河系』で主張したことを要約すると、人類の歴史、特にヨーロッパの文明史において、注目すべきメディア（／技術）の革新は、おおまかに三段階に分けることができ、先ず第1に表音文字・アルファベットの発明、第2にゲーテンベルグの印刷術の発明、そして第3に電子情報メディアの発明であった；表音文字は視覚を強調することにより聴覚や触覚その他の感覚を分断・閉鎖・抑圧し共感覚を壊乱したが、そのうえに印刷術は、表音文字の行ったことを徹底する形で、バランスのとれた聴覚的世界・部族的共同体世界を破壊すると同時に無意識を産み出す一方、抽象化された等質的空間を視るヨーロッパ特有の視覚と諸機能の専門化により近代的世界をもたらした；しかし今やTVを始めとする電子情報メディアは地球全体を同時的な場に変え、視覚と聴覚を再結合することにより、バランスのとれた聴覚的・部族的・相互依存的・統合世界を再創造できる新しい発展段階に到達している、というのがその大筋である。このように彼は、印刷術の発明に至る前半では機能毎に専門化し統合感覚を失わせるメディアの弊害を批判しながら、電子情報メディアの登場以後の後半では批判を停止し、逆に新しい統合的世界の到来について楽天的に期待を語る。その技術決定論的な論調が紡ぎ出すカイアズマス（*chiasmus* 交差配列法）風に正負逆転するレトリカルな論旨の複合生と、その複合生を支える「地球村」状況と人間進化に対する期待感——その期待感のカトリック神学者ティヤール・ド・シャルダンの進化思想が描き出す「技術的頭脳」（*technological brain*）や「宇宙皮膜」（*cosmic membrane*）（『ゲーテンベルク』53）に触発されたものと思われる——は、不審である。

今日消費主義（*consumerism*）と一体化した形で現実化しつつある高度情報化社会は、決してマクルーハンの礼賛するほどに充実した未来を約束するものではない。むしろ大

量消費・大量廃棄を恒常化し、破局を早めるものであること、また電子情報ネットワークによる同時性・グローバルな共同体も、身体性を衰弱させるヴァーチャルなものでしかないことについては、すでに別な場所で論じた事柄であるので（拙論「情報化・消費社会におけるコミュニケーションと自然」参照）繰り返さない。本論で指摘したいのは、マクルーハンのメディア論が、その博引旁証ぶりにも拘わらず、人間の社会経済的領域と精神的主体性の領域における議論に限られ、まったく生態学的自然の領域に及ぶことがない点である。なぜそうなるのかといえば、例えば『マクルーハン理論——電子メディアの可能性』（*Explorations in Communication*）の日本語版読者へのメッセージで「いまや私たちは、私たち自身の神経組織を情報環境に延長し、この環境は私たちの神経組織の多くの特性、私たちの感覚中枢の多くの特性をもつにいたった」（9）と述べるように、マクルーハンは、人間の感覚・身体機能の拡張としてのメディアを語るうえで感覚・身体性に何度も言及しながら、身体性の延長先にある人工物について語ることに終始し、生命体としての身体それ自体に視線を戻すことを忘れてしまっているから、あるいは様々な生物にとっての具体的な存在の諸条件を忘れさせる強い抽象化傾向・要因を宿しているからであると思われる。彼の「人間の拡張」としてのメディア論は、その意味で、一方向的なコミュニケーションの論である。また環境に対する姿勢としては明らかに人間中心主義的で、部分的にはヨーロッパ中心主義的でさえある。

対照的に藤本の考える「宇宙と人間のコミュニケーションメディア」としての農業は、宇宙と人間の相互的コミュニケーションを可能にするものであり、人間存在にとって食べることの不可欠さと根源的重要性、いわば人間の身体性の自覚を通して「大きな生命連鎖、輪廻」、言い換えるとコミュニケーションの中に導くものである（『有機農業心得』30）。食・農は彼の著作の至る所で、例えば次のように、繰り返される最重要度の主題である。

人間は生き物を殺さなければ生きてゆくことができない罪深い存在なのだ。この「業の深さ」とその自覚にこそ「文化」の源泉がある。／なにもかもがわからなくなった混沌の時代。僕たちの帰るべきは「食」と「農」の現場であり、「食べる」ことは「殺す」ことだという現実の直視である。子供たちの教育も、大人たちの健康もその現実の直視の中に解決策があると考えて間違いない。（『農的幸福論』20）

彼の場合、コミュニケーションは生態学的自然の領域は勿論、社会経済的人間の領域と精神的主体性の領域に亘るもので、そのようなコミュニケーションのための媒体としての農業は、人間が造り出したテクノロジーとしての性格より、人間が立脚する根底の条件と常に離れることのない自然と文化双方を包含する基層的生活スタイルとしての性格

の故に重視されている。マクルーハンと対照させていえば、藤本にとって農業の意義は、人間の感覚・身体性の回復あるいはアイデンティティの自覚をもたらす点にこそあり、人間の機能の拡張ではありえない。また拡張された機能による農業の生産性拡大も、もはや絶対的価値ではありえない。その点、次の引用の示す通り、マクルーハンとは正反対である。

機能的な側面から万物を見てゆくこと、より早く遠くへ移動できること、より高く大空へ舞い上がれること、より深く、長く海に潜れること、より強く大きなエネルギーを生み出すこと、より長い時間生命機能を維持すること、それが価値であったように思える。そして「なんのために」ということは、「発展」「進化」という絶対的な価値によって説明されていたのであった。いままではそれでもよかった。〔……〕しかし、人間の機能の拡大はこの地球のすみずみまで浸透した。より拡大を図ろうとすれば、地球の全構造自体を破滅させてしまわなければならないほどになってしまった。(『農的幸福論』79)

<共同体志向とアグラリアニズム>

両者は単に対照的なだけではない。共同体志向という点では共通している。しかも両者共に農本主義的共同体を志向していた。マクルーハンが農本主義的共同体志向を強めたのは、彼がアメリカ南部州の諸大学を中心とするニュークリティシズム運動に傾倒していた時期であった。アメリカ南部のアグラリアニズム(農本主義)は、近代の機械的世界観を批判し有機的世界観に立つ伝統的共同体への回帰を志向するものであったが、先述のように、一転してマクルーハンは情報テクノロジーの発展を土台に、人類の進化思想が醸し出すヴァーチャルな地球共同体の発想を礼賛するようになる。一方、藤本は早くから共同体志向の運動に関わってきた様子を次のように語る。

僕が、60年代半ばから携わった運動との絡みでいいますと、60年代以降、学生運動などの政治運動には大きく二つの流れができたように思います。一つは共同体志向、もう一つは政治志向。だいたい、このふたつが交互にでてきていますね。〔……〕僕の場合は共同体志向と政治志向の二つを体験しているんです。(『青年帰農』198)

しかし内ゲバに明け暮れるようになってしまった学生運動と決別し『人間は万物に謝らねばならない』を出版した1972年頃には既に、原始共同体や封建的義理人情の世界を含む共同体志向一般を無条件に価値として評価するわけにはいかないことや、共同体が常

に機能の拡大に伴って変化してきた経緯を述べた上で、「人間機能の拡大はこの地球上をすべてとらえつくしてしまった。そして、旧来の共同体理念とその形式は、すべてまったく意味を失ってしまった」と彼は書いた（『農的幸福論』79）。つまり、学生運動を離れた藤本は、マクルーハンの到達した結論を無意味と見なす地点から再出発したのである。有機農業普及運動「大地を守る会」、有機農産物と無添加食品流通のための法人「株式会社 大地」、農事組合法人・自然生態農場「鴨川自然王国」、政党「希望」、株式会社「ナチュラルコミュニケーションズ」等々、種々の運動団体設立と経営活動に奔走した後、2002年にはインタビューにおいて次のように語っている。

そこで、あらためて共同体志向とは何かを見つめてみますと、そのベースにはつねに農的世界が存在していることが分かった。どんな共同体でも、そうです。／これは、当たり前の話してしてね。共同体というのは、その内側で生命連鎖が基本にあるわけで、それは食物連鎖、つまり農的生活なしには成り立たないからです。共同体の中では、人間と社会と自然というトータルな生命の流れがある。ですから、あえて共同体というのは生命連鎖であるといってもよいのではないかと思います。あるいは、生命のつながりがスムーズに流れている状態のことを、共同体と呼ぶのかもしれない、と。（『青年婦農』199）

ここに述べられている共同体志向は、マクルーハンが「部族的太鼓の鳴りひびく小世界」「制することのできない恐怖の時代」「全面的な相互依存の時代、上から押しつけられた共存の時代」（『グーテンベルク』53）などと警告を繰り返す過去の共同体への盲目的回帰願望（nostalgia）ではない。「どんな共同体でも」ベースには農的世界があることをよく理解する必要性が主張されているのである。比喩的に言えば、高空を飛ぶ飛行機の旅客に対し数時間前にいた場所に逆戻りすることではなく、地上に降りて歩くことを提案しているようなものである。つまり藤本は、過去への回帰というよりはむしろ基層的な生き方を積極的に評価する意味での回帰志向を抱いているといえよう。まさにそのような趣旨で彼は、ウェルネスファーマーが「里山往還型半農生活者」として、都市と里山間のコミュニケーションを行うよう提案しているのである。また彼の建白書が、「農工一体」の「持続循環型田園都市」の構築を提案していることから分かるように、藤本の提案は、際限のない拡張追求を否定するけれども、工業技術の全面的否定を前提とするものでもないし、都市や商品経済の全面的否定を前提とするものでもなく、適正規模の工と商の「王道を行く」民主的な農的共同体の構想である。農業と他の職業を組み合わせた生活をさして「半農半Xライフ」という用語が最近使用されようになり（塩見 204）その実践例がよく話題になる。藤本の提案する「里山往還型半農生活」は

塩見の「半農半Xライフ」とほとんど同じである。藤本の指摘どおり今日農業従事者を指して用いられる「百姓」という言葉がかつては様々な職業の人を指していたように、元来「いずれの職業も必ずしも専門化していたわけではなく、職業の乗り入れが普通に行われていた」(『青年婦農』201)ことを考えれば、藤本と塩見、両者の案は十分現実性を有している。

マクルーハンは一時期それに共鳴したことがあるとはいえ、到底アメリカ南部アグリタリアニズムの継承者とはいえない。アメリカでは今各地でニュー・アグリタリアニズムの台頭が注目されているが、³ その中核的存在であるウェンデル・ベリー(ケンタッキー在住の農民・詩人・小説家・エッセイスト・環境保護運動家・哲学者・ケンタッキー大学英文科教授)は紛れもなく南部アグリタリアニズムの継承者である。政治学者キンバリー・スミスは、ベリーが南部アグリタリアニズムをジェファーソン以来の伝統に根ざすポピュリスト的・懐旧的なものから脱却させ、エコロジー思想に結びつけつつ民主的で今日的なものに再編したとして高く評価している(Smith 1-10)。ベリーを藤本と比較してみると両者の相似は驚くばかりである。ベリーは*The Art of the Common Place*において、農業中心の経済を基盤にして自立的で民主的なローカル・コミュニティ(地域社会)を再編するよう提唱している。彼のいうローカル・コミュニティは住民とその地の社会、文化、歴史、宗教ばかりでなく地理や地形、気候、土壌、と種々の生き物を含んでいるが、人間は土・地球の循環的創造活動への参加である農業を営むことによりローカル・コミュニティとの様々な「繋がり」(connections)を回復できること、またその結果として心身および社会・自然環境の健康(health)・健全さ(wholeness)を回復できること、そうする必要がなくなっていく程に増大していることを繰り返し説いている。ベリーのいう「繋がり」(connections)を「コミュニケーション」に置き換えると、藤本との近さがより明確になるであろう。両者は共に農的生活の中に「トータルな生命の流れ」を感じ取っているのである。

ベリーが手厳しくWTOや市場経済を非難している(Berry 242-3)のに対し、藤本は、すでに見たとおり、「健康・環境コストを生産コストに練り込んで価格設定する」ことを条件に、それらを容認している。恐らく、これを妥協的あるいは改良主義的と受け止めた読者も多いに違いない。しかしよく考えてみれば、これはかなり厳しい条件であることが分かるだろう。⁴ イギリスの政治学者アンドリュー・ドブソンは、エコロジズム(ecologism)を新しい政治イデオロギーとして提唱する中で、環境主義(environmentalism)とエコロジズムを峻別する。その説によると環境主義は、既存の価値や大量消費・大量廃棄型の産業社会構造を容認したまま、環境問題に対し技術的・管理的改善を提示する改良主義であり「グリーン」イデオロギーとしては失格である。これに対し、エコロジズムは自然と人間を一つの生命共同体としてとらえる生態系中心主義(ecocentrism)に

より価値観や社会構造の根本的変革をとおして永続可能な (sustainable) 社会を目指す「グリーン」イデオロギーである (ドブソン 1-18)。更に検討すべき点はいくつかあるものの、⁵ 結局ベリーと藤本の思想には、ドブソンのいうエコロジズムが貫流していることは明らかである。なぜなら両者は共に、人間の社会経済の成長・拡張が既に適正な規模を超えているとの認識に立ち、「テクノロジー的で豊かなサービス社会としての〈脱産業社会 (post-industrial society)〉」ではなく、永続可能な (sustainable) 「農業経済としての〈脱産業社会〉」(ドブソン 11) を目指しているからである。もっとも両者はドブソンのような理論家ではない。彼らにとって農的ライフスタイル (agrarianism) は、政治的イデオロギーを超えた文化的・精神的要素を含む包括的なものである点が強調され、実践によってそのことを示そうとする傾向があるので、一時代の時事的な政治経済問題に照らしてのみ判断すると真の姿を歪めることになるだろう。

ベリーが奴隷制度を基盤とする旧アメリカ南部社会で生まれたアグラリアニズムを継承し、それを民主的に再編したように、藤本は田中清玄や石原莞爾等の影響を受けながらその影響を新しい世紀の農業的共同体構想に再編しようと苦心している。第二次世界大戦と戦後の歴史に関する風説において、前者は右翼民族主義、後者はファシズムと一般に結びつけられることが多い人物で、いわばラベルを貼られた伝説的存在である。⁶ 再編したといってもしかし、ベリーも藤本も、当然ながら社会・文化的伝統を多分に継承している。藤本の考え方は、左翼思想か右翼思想か、革新か保守か、社会主義か資本主義か、集権主義か分権主義か、民族派か国際派か、過激派か改良主義か、あるいは単なる順応主義かといえば、いずれとも言えず、見方によってはそれらいずれの要素も幾分かずつ含んでいる。民主的な共同体に基づくモラルを重視する政治思想「コミュニタリアニズム」を唱道するアメリカの政治学者アミタイ・エツィオーニは、「善き社会は、国家と市場とコミュニティを均衡させる。進むべき最善の道は、政府を問題だとも解決だとも考えるのではなくて、善き社会のパートナーとして考えることである」と述べている (23)。藤本は、いわばコミュニタリアン・エコロジスト・アグラリアンとでも呼ぶべき立場から「里山往還型半農生活」を「善き社会」として提唱していると言えるかもしれない。

ただし、このようにカタカナで外来語のラベルを貼ることは、伝説の影響下においてナショナリズム的またはノスタルジアの感傷と誤解される恐れを少なくし、国際的で今日的意味合いを強調することにはなるが、大切なポイント、すなわち基層的生き方の積極的評価の側面を見えにくくしてしまうことにもなる。その側面に関連して最後に引用するのは、千葉県鴨川自然王国に近い過疎地の山里における夏祭りの様子である。普段は顔を合わせぬ者同士が、肩を並べて神輿を担ぎ、「滝のように汗を流し」、「長老」も「若造」も混じって酒を酌み交わす村祭りの不思議な魅力について、彼はこう述べる。

厳然とした指導が目に見える形で貫徹されているわけではない。あるべきところになるようにして指揮権がゆだねられ、それが場面場面で微妙に変わってゆく。どうもそれが誰なのか後で思い出しても、よく分からない。知らず知らずのうちに、なるようになっていくということほど気の落ちつくことはない。たとえ、その奥におどろおどろしい黙示の世界があろうとも、明と暗、表と裏が互いに棲み分けられて、認め合っていれば良い話だ。

自然界のすべてが解明されるものでもなければ、すべてが一元化されて、同じ価値判断で統一されるものでもない。聖者も、愚者も、男も女も、神も鬼も、仏も妖怪も宇宙的合一の前では相関し合っているのだが、祭りこそすべてが一堂に会して互いを認め合う場なのだ。(『農的幸福論』167)

このように藤本には日本の土俗的風習に共鳴していく面がある。各地の共同体——人間社会および自然界の両方を含む——に固有の特性を大切にすることは、エコロジー思想の根幹であるから、漢字のラベルにせよカタカナのラベルにせよ、表面的装いに目を奪われてこの肝心な点を見失ってはならない。日本の共同体の基層に横たわる土俗的風習から彼が「すべてが一元化されて、同じ価値判断で統一されるものでもない」という原理的認識を導き出す点は更に重要である。引用文中の「棲み分け」という語は今西錦司の影響を物語るものであるが、今西の「棲み分け理論」自体、自然淘汰を通じて適者生存の原理が進行し生物界の一元的階層制ピラミッドが形成されるとする進化論の土台を揺るがす意味合いを持っている。確かに、藤本が21世紀型ライフスタイルとして提案する「里山往還型半農生活」は、一元的イデオロギーですべての人の生活全般を律するものではなく、それぞれの風土毎に異なり、多様な要素が相関し合い変化するその地の状況に対応して生きて行く実際の多数の生活者のために、各自の選択の余地を大きくとったライフスタイルである。

誰かが指揮権を握り体系的にすべてを取り仕切るのではなく、多様な構成員がそれぞれ場面に応じて指揮権を握り「知らず知らずのうちに、なるようになっていく」祭りの場、そこには一元的でもアナーキズム的でもない、多神教的な共同体観が示されている。互いに「棲み分け」認め合い、場面に応じて主役になり、指揮権をゆだねられたりもするその場の参集者は、人間とは限らない。「神」や「鬼」、「仏」や「妖怪」、またタヌキ、キツネ、クマ、魚、虫、時には山や川、太陽や星であったりもするであろう。そう言えば、大都市における拡張主義的演出の明白な祭りや「イベント」は別種にすぎないが、町や村の多くの古い祭りは、農的世界の永続を祝い・希求するメディアでもあった。そのメディアには、地球全体を同時的に結合する力はないものの、少なくとも数百年から数千年の時を越えてコミュニケーションする生命力があることは実証済みである。

注

- 1) 環境省による「里山里地」の定義：「里山里地とは、奥山と都市の中間に位置し、集落とそれを取り巻く二次林、それらと混在する農地、ため池、草原等で構成される地域概念です。／農林業にともなう、さまざまな人間の働きかけを通じて環境が形成／維持されてきました。」（環境省「里山里地パンフレット」）
- 2) ここで使われている「農工一体」という用語は、石原莞爾の用語を採用したものと思われる。藤本は、石原について「その著作や発言は現代にも通じる部分が少ないありません。／例えば「平和三原則」の提案。柱は「都市解体」「農工一体」それに「簡素生活」です。先端の思想でしょう」と語っている（『青年婦農』199）。
- 3) E. フレイフォォーグは13名のエッセイストによるアンソロジーを編集し、ニュー・アグラリアニズムの台頭を論じている（Freyfogle *New Agrarianism*）。
- 4) 問題は誰が商品価格を設定するのかである。
- 5) 更に検討すべき点のうち最大の問題は、ドブソンが「生態系中心主義」(ecocentrism) をエコロジズムに必須の特徴と見なす点である。「生態系中心主義」の解釈次第では本論が指摘する共同体志向との齟齬も出てくることになる。
- 6) 藤本は、過激な街頭抗議活動により実刑判決を受け黒羽刑務所で3年8ヶ月過ごし、出所して間もない頃に田中清玄や今西錦司に会った（『農的幸福論』12-24）。石原莞爾については注2参照。

引用文献表

- ドブソン、アンドリュー『緑の政治思想—エコロジズムと社会変革の理論』松野弘監訳、栗栖聡・池田寛二・丸山正次訳（ミネルヴァ書房、2001）
- エツィオーニ、アマタイ『ネクスト—善き社会への道』小林正弥監訳、公共哲学センター訳（麗澤大学出版会、2005）
- 藤本敏夫『現代有機農業心得』（日本地域社会研究所、1998）
- 「ポジション〈位置〉が分かればミッション〈役割・使命〉が分かる」山村基毅インタビュー・構成『現代農業—青年婦農』増刊（2002）：196-203
- 『農的幸福論—藤本敏夫からの遺言』加藤登紀子編（家の光協会、2002）
- 服部桂『メディアの予言者—マクルーハン再発見』（廣済堂出版、2001）
- 加藤貞通「情報化・消費社会におけるコミュニケーションと自然」『メディアと文化』創刊号（名古屋大学国際言語文化研究科、2005）：21-34
- 環境省「里山里地パンフレット」9 Jan. 2006 <<http://www.env.go.jp/nature/satoyama/pamph/>>
- マクルーハン、マーシャル『ゲーテンベルクの銀河系—活字人間の形成』森常治訳（みすず書房、1986）
- 『メディア論—人間拡張の諸相』栗原裕・河本仲聖訳（みすず書房、1987）
- E. カーペンター共著『マクルーハン理論—電子メディアの可能性』大前正臣・後藤和彦訳（平凡社、2005）
- 農林水産省「食料自給率の部屋」26 Dec. 2005 <<http://www.maff.go.jp/jikyuuritsu/index.html>>
- 政策工房 J-Way 「日本の農業政策を考える」26 Dec. 2005 <<http://www.media-kiss.com/J/reikai/20050801.html>>

塩見直紀 「半農半Xライフのすすめ 農をベースに「天の仕事」を」『現代農業——青年帰農』増刊
(2002) : 204-209

Berry, Wendell. *The Art of the Common Place: The Agrarian Essays of Wendell Berry*. Ed. Norman Wirzba. Washington: Counterpoint, 2002.

Freyfogle, Eric T., ed. *The New Agrarianism: Land, Culture, and the Community of Life*. Washington: Island Press, 1976.

Smith, Kimberly K. *Wendell Berry and the Agrarian Tradition: A Common Grace*. Kansas: University Press of Kansas, 2003.